

内的な変容過程としての「不登校」
 ~ alternative narrative の生成 ~

立命館大学応用人間科学研究科
 対人援助学領域
 家族機能・社会行動クラスター

増加の一途を辿る「不登校」の現状を受け、文部科学省では10年ぶりに調査研究協力者会議が立ち上げられたが、そこで交わされる強硬な論調には危惧を抱かずにいられない。本研究では、「不登校」に本当に必要な要素とは何かを改めて考察するため、まず「不登校」がどう語られてきたかを概観し、さらに、3人の不登校経験者に対してインタビューを行った。インタビューの際には、不登校当時からその後にかけての対人関係の変化を中心に聞き取りを行った。児童青年精神医学、臨床心理学などの専門家によって治療対象として語られてきた「不登校」は、当事者をはじめ非専門家による積極的な語りがなされるようになった。さらに、専門家からの非専門的な言説、コミュニティの活用や ethnomethod を取り入れた取り組みなど、従来の個人療法とは異なるアプローチも模索されてきている。また、治療や指導の対象ではない alternative な不登校像として、本人が主体として語る narrative がある。実際のインタビューでは、「不登校」の経験を誇大視するのではなく、卑下するのではなく、“自己理解の一端”であり、“私の人生にとって必要なことだった” “不登校に「ならされた」んやなくて、不登校を選んだ自分がいる”といった等身大の不登校像が語られていた。以上のような流れを踏まえ、(1)「不登校」をどう語るか？(2)転帰をどう判断するか？(3)連携をどうとっていくか？(4)家族からの援助、家族への援助とは何か？(5)「不登校」をどう過ごすか？(6)臨床心理学的なアプローチとは何か？(7)専門家の役割とは何か？という7点について考察した。即ち、「不登校」は、社会的に認められたコースから逸脱し、再び戻ってきたわけではなく、本人が必要な event として主体的に選択した alternative な道である。「不登校」とはその人の人生に組み込まれた変化し続ける過程の一部であり、転帰の基準とは、あくまで治療的に関わる側の問題なのだと言える。専門家が出来る援助としては、「休養」が保証されるよう後押しすること、alternative な narrative の生成過程に介在すること、連携をとる際のコンサルテーションなどが挙げられる。なお、狭義の「不登校」の主流ではないが、危機介入も専門家の重要な役割である。「不登校」とは、対人関係の中で社会的に規定されていく「不適応」の状態であり、対立や葛藤も含めながら「折り合い」をつけていくためには、他者との interaction が不可欠と言える。生活者としてのその人を取り巻く、日常的な社会資源が活用されるよう、連携をとっていくことが肝要である。また、コミュニティの中に「居場所」を確保してゆくことは必要だが、家で安心して休養できることが前提である。本人に対してはまずは「そっとしておく」ことが望ましい。周囲から付与された「私」像、あるいは自らが望むあらまほしき「私」像と、ありのままの「私」とが混乱しているときに、積極的にはたらきかけられることは却って葛藤を深めてしまうことになりかねない。親は、専門家や親の会など外へエネルギーを向かわせることが有効である。ほんの「ひと押し」する時機が来るまでは、「何もしない」状態を受け入れることが重要である。何をしていたか思い出せないような無為な時間をどこまで認められるかということは、「休養」を保証するためばかりではなく、学校へ行かなくても、何もしていなくても、生きているその人をそのまま認めるというメッセージとなる。また、臨床心理学的研究による「不登校」は、病理や不適応として原因を追求、回復させる立場から、より実践的な研究へと変遷してきた。しかし、それは従来の心理学的アプローチを否定するものではなく、密室の臨床と並行しながら、生活の場へと開かれた知見として還元されていくものだと言える。社会的な価値基準からは見落とされがちな「不登校」という過程の意義に注目し、本人が主体的に立ち上げてゆくオルタナティブ・ストーリー生成の過程を支えていくものとして、専門家によるなまなざしが介在していくのだと考えられる。本研究のインタビューでは、言わば前段階として本人の narrative を聞き取っていく作業を行ったが、より専門的にオルタナティブ・ストーリーの生成を実現するものとして、臨床心理学的な知に期待する。それは、臨床の場のみにとどまるのではなく、個人の narrative にこめられた積極的意味について、共有可能な narrative へと変換し、本人、家族、コミュニティをつないでいく役割をも担っているのだと言える。